

III 養豚部門

1. 本県養豚の動向

- (1) 平成 23 年 2 月 1 日現在の県内豚飼養状況は、飼養戸数 64 戸、頭数 74,900 頭で対前年比は戸数 90.1%、頭数 94.0%となり、戸数で 7 戸減、頭数では 4,800 頭の減となった。また、1 戸当たり平均飼養頭数は 1,170 頭となり前年比 105.1%となつた。
- (2) 平成 21 年度における豚肉の県内自給率（県内総消費量 164.8 千トンに占める県内生産量 10.8 千トン）は 6.6%で前年比 0.3%増となつた。

2. 診断農家成績の分析概要

平成 23 年度畜産経営技術高度化促進事業実施にあたり、養豚部門の経営診断指導対象（経営診断に基づく改善指導 4 戸、経営管理技術指導 1 戸、生産技術指導 2 戸、フォローアップ指導 4 戸）の中から総合的な分析に必要な数値が把握できた 4 事例について概要を述べる。

(1) 経営の概況

- ◆ 4 事例とも繁殖・肥育一貫経営であり、すべて養豚専業経営である。
- ◆ 経営組織として 3 事例 (No.1・No.2・No.4) が法人経営で 1 事例 (No.3) は家族経営ある。
- ◆ 労働人員 1 人当たり母豚飼養頭数は全 4 例の平均で 368 頭であった。

(2) 繁殖成績

◆ 人工授精の活用

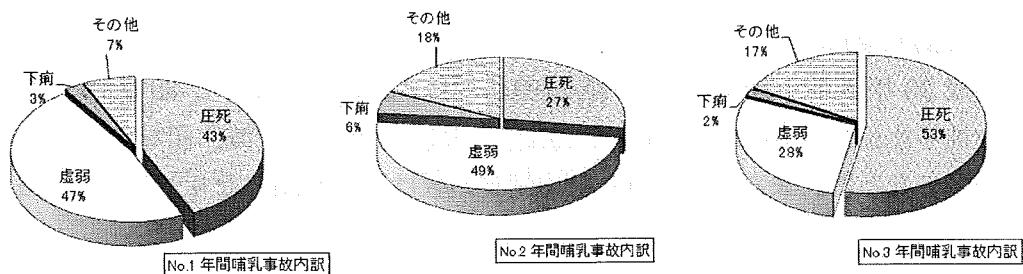
4 事例の平均母豚飼養頭数 368 頭に対して、平均飼養種雄豚数は 21.1 頭で、雄豚 1 頭当たりの母豚数は平均 17.5 頭 (14~36 頭) となっている。これは自然交配主体（以下 NS）か人工授精技術活用（以下 AI）かによって異なる。

AI を活用しているのは 4 事例のうち No.1 と No.3 の 2 事例の農場であるが、利用方法は自家採取での 100%AI または購入精液である。100%AI 活用農場での雄豚保有頭数は母豚 19~36 頭に対して 1 頭で、比率の低い農場は F_1 生産のための純粋雄豚 (L·W) を抱えていることが関係していると思われる。

◆ 1 腹当たりの生存子豚、離乳子豚頭数と育成率

1 腹当たり生存子豚頭数は平均 10.3 頭 (9.0~11.4 頭) で指標値 10.6 頭以上となつた事例は No.2 の 1 事例のみであった。生存産子数が 10 頭を下回つた No.4 の事例では、今後とも、分娩時の助産や交配適期をつかみ、ずれによる受胎数（総産子数）の低下を

防ぎ、日常の発情チェックや夏場の精液チェックなど季節ごとに応じた交配妊娠管理を行う等、生存産子数の増加に努めて欲しい。



1腹当たり離乳子豚頭数の平均は9.0頭（8.2～9.5頭）で、指標より0.8頭下回り、指標値をクリアーした事例はなかった。

離乳子豚数は生存子豚数や育成率などによって大きく変動する。正常な飼育管理下における1腹当たりの産子数は、母豚の品種構成や遺伝的資質によるところが大きく、これに交配時の発情状況（交配適期）と交配精液性状、種付回数などが総合されたものであるため、人為的に大幅増やすことは難しいものの、離乳子豚数の改善策としては分娩施設面の見直し、分娩・哺乳時のきめ細やかな管理や分割授乳の導入、夏場の圧死対策などの飼養管理改善による育成率の向上を目指す方が容易であろう。

育成率は平均87.5%となり、83.1%～90.8%とやや低かった。90%に達したのは1事例のみで、90%に達しない経営は哺乳豚管理の見直しが必要。特に哺乳中子豚事故で1腹当たり1頭以上を損耗している事例については、分割授乳の実施による虚弱死の低減や哺乳子豚管理の見直しが必要である。

◆ 離乳日令と分娩回転数

4事例の平均離乳日令は25.7日で前年より0.6日の減となり、4事例とも26日前後とバラツキはなかった。

分娩回転数の平均は2.23回転で、最低値2.1～最高値2.3となった。

◆ 更新率

4例の種雌豚更新率平均は41.2%であったが、外部導入から自家更新へ切り替えたNo.3は更新率が低く、今後は安定的に更新するための交配計画が必要となる。

更新に際しては年間を通じて毎月安定した分娩数が得られるように計画的に行うことが望ましく、また、淘汰・更新は固体ごとの繁殖成績記録によって的確に行い、母豚群の平均産次を4～5産にすることが望ましい。

(3) 肥育成績

◆ 母豚1頭当たり出荷頭数

1母豚当たり出荷頭数は、17.8～21.2頭となり、平均は19.3頭と前年平均より0.2頭の増となった。指標値の21.4頭をクリアーできた農場はなかったものの、20頭以上の良好な事例もあった。しかし平均値は指標値と比べると2.1頭下回っている。原因としては、いろいろな要因が複合した結果ではあるが、その主な要因として考えられるものに育成率の低下につながる哺乳中子豚の事故と離乳後の育成から肥育出荷までの事故による損耗がある。

◆ 事故率

離乳から出荷までの事故率の平均は7.0%で指標の3%以下とは大きな隔たりがあるものの前年度平均より0.2%の減となり、年々減少傾向にある。農場間較差は5.9%～8.4%と大きな格差はなく、各事例とも安定していく傾向にある。

近年、PRRSやPED等の新しい病気や、ヘモフィルス、パストレラ等の慢性呼吸器疾病も広く浸潤している中で事故率3%以下という指標は、高いハードルとなっているが、4%以下レベルにまで到達するよう努力が望まれる。

◆ 肉豚・枝肉の出荷

本年度の平均出荷生体重は114.3kgで前年平均と比べ0.7kg下回った。平均枝肉重量は75.5kgで前年平均と比べ0.2kg上回り、肉豚出荷豚の枝肉歩留まり率は平均で66.6%となった。

◆ 飼料要求率

本成績の農場飼料要求率の積算は、農場内での飼料給与総量を肉豚出荷生体量と候補豚頭数(110kgと推定)の合計体重で除したものであり、活豚出荷、棚卸体重の増減を見ていよい。

農場飼料要求率は平均で3.58(3.36～3.79)で、指標値の3.4をクリアーしている事例はNo.1のみであった。農場要求率には事故率が大きく影響し、特に肥育中期以後の事故が大きく関与するので事故内容を把握した損耗防止対策が必要である。

◆ 豚舎面積と密飼いの影響

豚舎面積と飼養密度の評価については、全体面積の大小よりも、ステージ別・用途別の豚房のアンバランスによることが多く、密飼いの多くは特に離乳豚房、肥育豚房の不足による例が多い。慢性呼吸器病による事故率の上昇原因として密飼いが主要な原因として重視されているが、頭数に合せた施設の改善か、施設規模に合せた飼養頭数の調節により事故率の低減を図って欲しい。

(4) 収益・経済性分析

◆ 種豚1頭当たり生産物売上高

養豚一貫経営における収益性を検討するにあたり、母豚1頭当たりの生産物売上高をみると表-2・表-3にあるように、平均647,589円(533,570円～731,887円)で前年平均より12,865円の増収であった。

出荷豚の枝肉 1 kg 当り販売額は表-3 に示すように平均 442 円となり、前年度平均と比べ 5.9 円の増額となった。ほぼ全ての経営で前年度より販売単価が上昇した。

戸々で見ると No.4 の 394 円と NO.3 の 490 円とでは 96 円の差があった。各経営の決算期の関係による市場価格差もあり一概に比較出来ない部分もあるものの、銘柄豚生産割合や上物率等の違いも、価格差を大きくする要因の一部である。

肉豚出荷価格の年間変動は大きく、出荷のタイミングによって同質の肉豚でも大きな収益差が生じる。平成 22 年の東京市場上物価格は平均 461 円で本年度調査 4 農場の年間枝肉価格平均 442 円となり上物平均価格の 19 円安となった。

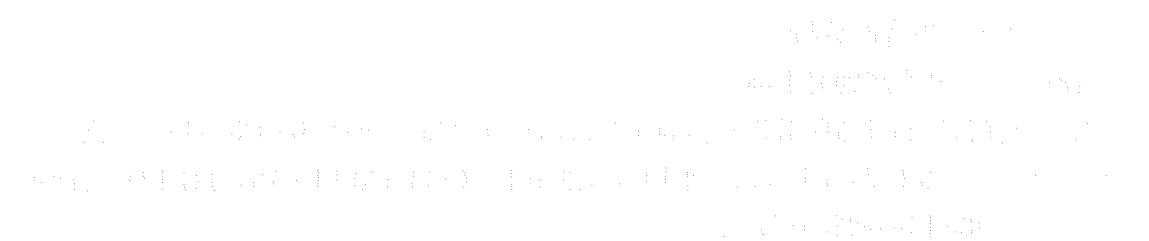
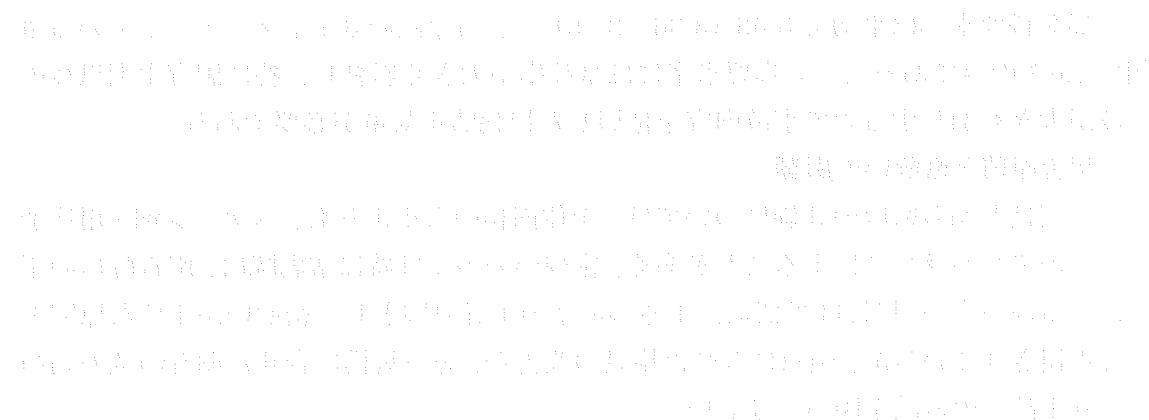
平成 22 年 東京市場 上物平均枝肉卸売価格 (円/kg)

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
418	423	417	428	487	540	484	489	513	432	434	472

◆ 生産費

種雌豚 1 頭当たりの生産費用及びその構成費目の内訳については表-2 に示すとおりである。

種雌豚 1 頭当たりの 4 事例平均生産費用は 567,859 円となり、その構成費割合を円グラフにしたもののが図-1 である。平均では構成費割合の大きい順に、飼料費が過半の 55% を占め、次いで人件費（給与手当+役員報酬）が 21%、衛生費 6%、これらの主要 4 費目で 82% となった。また各農場の主要費目割合を棒グラフにしたもののが図-2 である。



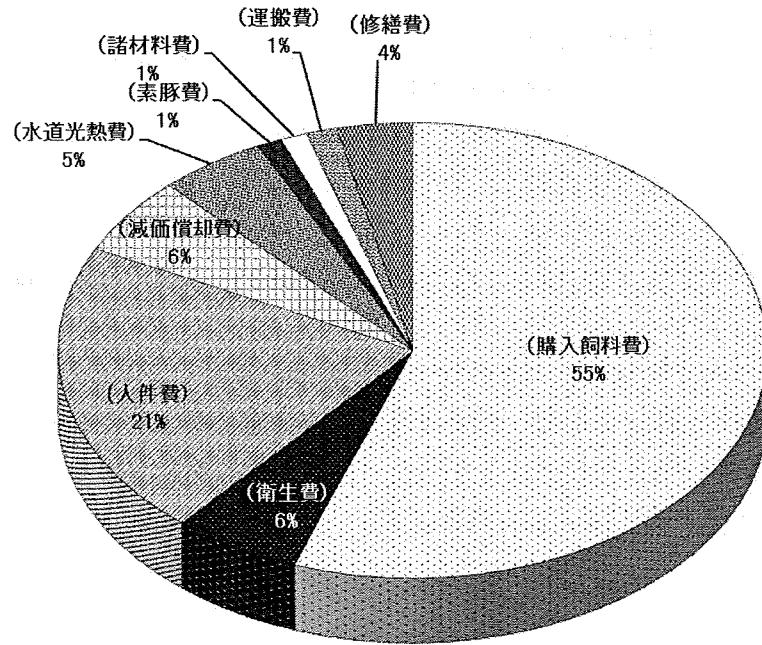


図-1. 生産費用の構成比割合

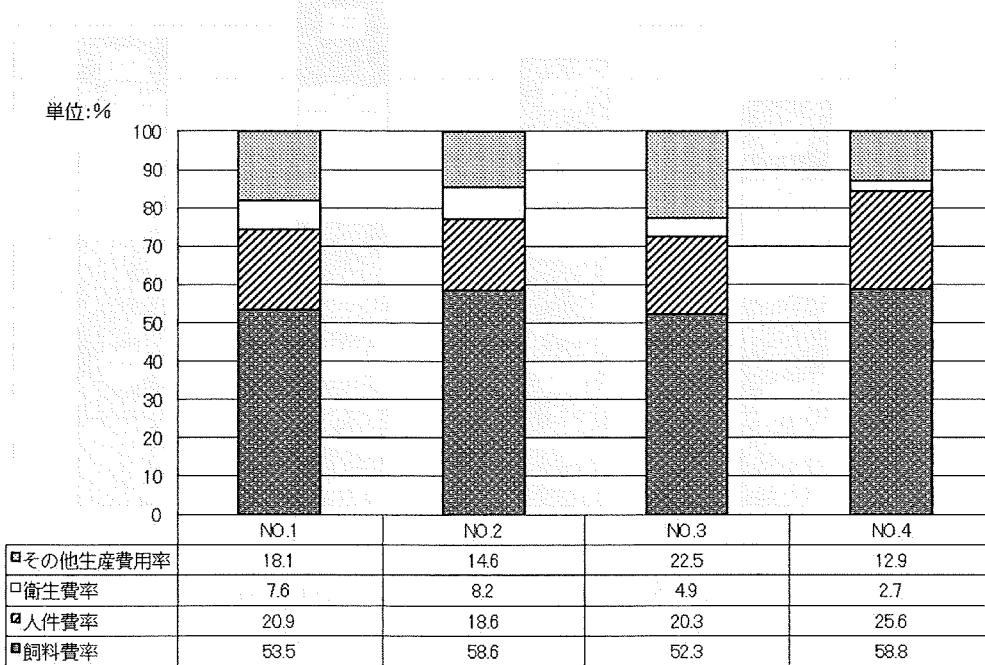


図-2. 生産費用の構成比割合

◆ 売上高に占める主要生産費の割合

売上高に占める各生産費目の割合は、図-3に示すとおりである。飼料費の割合については4農場の平均は48.5%で前年より5.4%減少した。

売上高に対する衛生費割合は表-3のとおりで、平均5.0%となり種豚1頭当たりの衛生費（表-2）については平均33,061円で（12,940円～46,308円）と差があったものの前年平均に比べ14,701円の減少となり、No.1～No.3の事例では全て前年より減額となった。

種雌豚1頭当たりの生産物売上高と生産・販売費用を対比してみると、図-4のようにNo.3・No.4の事例の経営で生産・販売費用が生産物売上高より上回った。当期利益では補填金、奨励金等の事業外収益によりプラスとなったも経営もあるものの養豚生産販売では費用が売上を上回る結果となった。

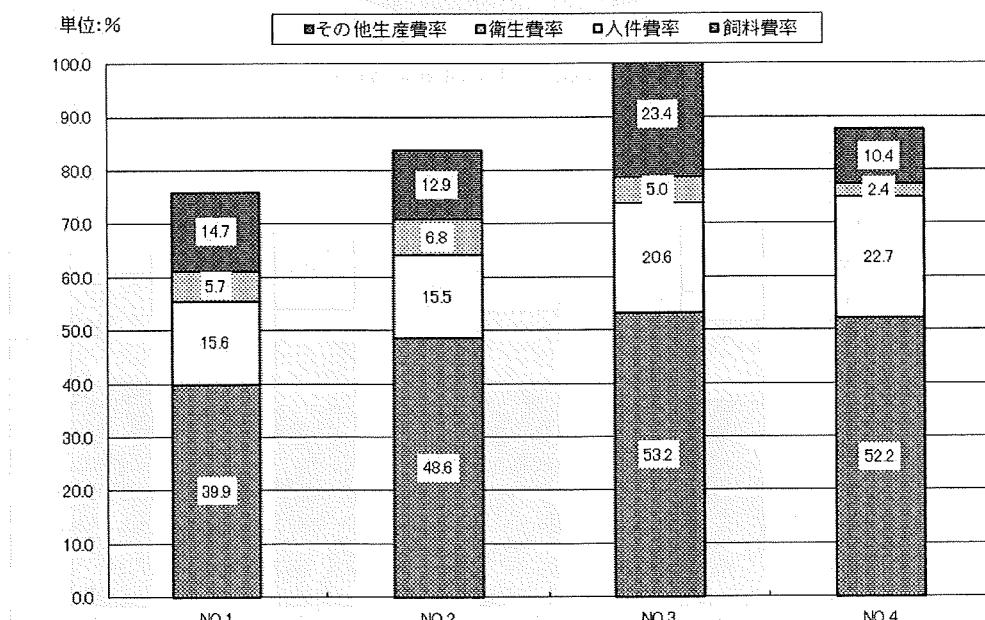


図-3. 売上高に占める主要生産費の割合

◆ 飼料価格

生産費で最大構成比率を占める飼料費の1kg当たり加重平均価格は表-3に示すように40.3円となり前年平均より5.2円下がった。一昨年から比べ加重平均で13.3円下がることになる。それぞれの飼料単価については、年間全飼料購入金額を全購入量で除したもので、自家配合（原材料価格のみで労賃をみない）、をしているところ等があるため単純に比較はできない要素もあるが、36円～48円と差があり、購入単価以外にも

飼料給与体系の検討が望まれる。また、食品未利用資源の活用により、飼料単価を抑えている事例もある。

◆ 種豚 1 頭当たり利益

1 母豚当たりの飼料費（加重平均）が前年比 90.9% となり、母豚当たりの生産原価も前年比 96.3% と低減できた。また、売り上げに関しては、平成 22 年（1 月～12 月）は東京市場の上物平均で 460 円と安定した相場の中で、No.3 の事例以外は収支がプラスとなった。種雌豚 1 頭当たりの当期利益の平均は -24,721 円となり前年平均と比べ 11,329 円の増額となった。

それぞれの事例を見てみると、No.1 は飼料 kg 当たり平均価格が前年に比べ -1 円の 36 円/kg となり、飼料費コスト削減により売上高飼料費率は 40% 切った。出荷豚 1 頭当たりの生産原価も -153 円の 26,674 円とコストダウンされた。枝肉 kg 販売単価では安定的な豚価で前年に比べ 22 円高の 460 円となり、出荷豚 1 頭当たりの販売額では前年とほぼ同じ枝肉重量ながら前年比 1,644 円高い 34,820 円となった。1 母豚当たりの肉豚出荷頭数では 18.5 頭とやや少なかったものの、前年比 1.1 頭増え 1 母豚当たりの売上高は前年より 51 千円の減少で当期利益は 22,647 円という結果となった。

No.2 は飼料 kg 当たり平均価格が前年に比べ -5 円の 41 円/kg となり出荷豚 1 頭当たりの生産原価は 26,356 円と前年に比べ -2,194 円となった。枝肉 kg 販売単価は前年に比べ 13 円高い 424 円となった。荷豚 1 頭当たりの販売額は平均枝肉重量で前年比 0.3 kg 増となり、前年より 1,091 円高い 31,774 円となった。1 母豚当たりの肉豚出荷頭数は 21.2 頭と前年に比べ 2.2 頭増頭し、1 母豚当たりの売上高は前年より 97 千円増額した。当期利益は事業外収入が少なかったことにより 1 母豚当たり 1,225 円という結果になった。

No.3 の飼料 kg 当たり平均価格は前年に比べ -5 円の 48 円/kg となったものの、出荷豚 1 頭当たりの生産原価は前年度に比べ 1,594 円の増となった。1 頭当たりの販売額は枝肉 kg 販売単価が 31 円上がった事により、前年に比べ 2,491 円の増額となった。そのため 1 母豚当たり売上高も前年比 3 千円余増額したものの、施設改修や大規模修繕による費用が生産費を上昇させた結果、1 母豚当たりの当期利益は △130,423 円となった。

No.4 は飼料 kg 当たり加重平均価格が 36 円と飼料費コスト削減による生産費用のコストダウンがされており、出荷豚 1 頭当たりの生産原価は 27,434 円となった。しかし、枝肉 kg 販売単価が 394 円とやや低く、出荷豚 1 頭当たりの販売額も 29,810 円とやや低い。1 母豚当たりの出荷頭数 17.8 頭も響き、低コストながら純利益が伸び悩んだ結果となった。

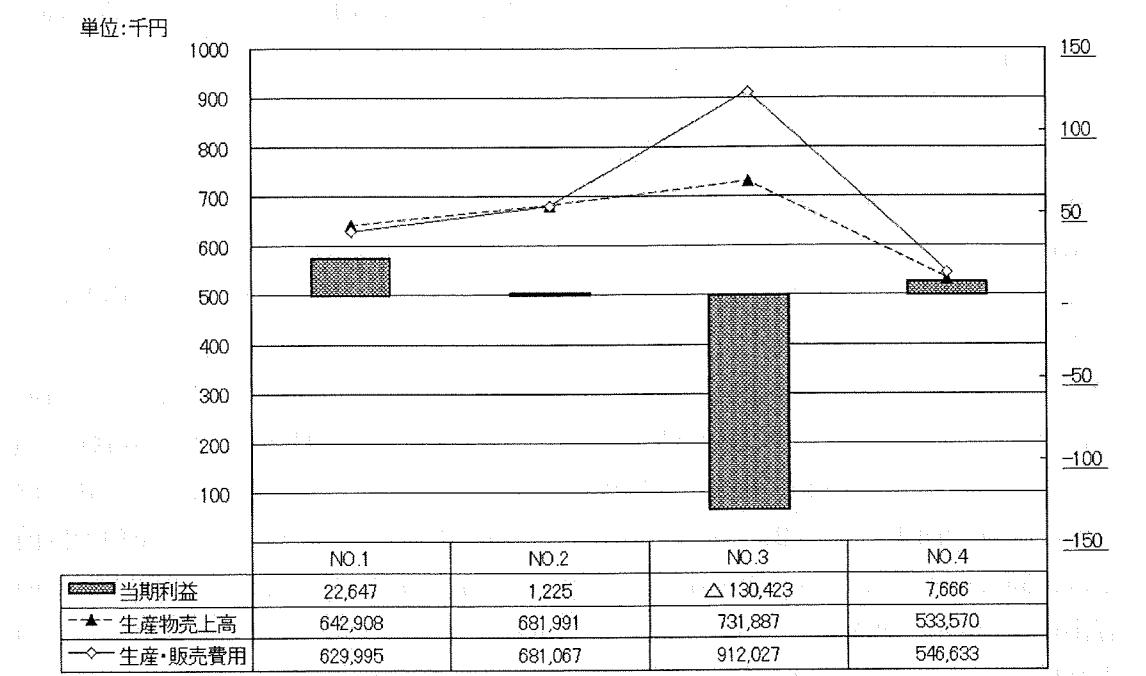


図-4. 種豚1頭当たり売上高と経常利益

子豚の販売額は年々増加傾向にあるが、経常利益は年々減少傾向にある。また、生産物売上高も年々減少傾向にあるが、生産・販売費用は年々増加傾向にある。

◆ 種雌豚当たり所得

4事例の種雌豚1頭当たり所得平均は40,391円(19,260円~68,678円)となり、指標値の10万円以上の所得があった事例はなかった。所得は当期利益に役員報酬又は家族労賃を加えたもので、役員報酬(家族労賃)の高低が大きく関係している。

3. 指導の方向と対策

H22は前年の飼料原料の価格高騰による飼料費比率の上昇から、若干落ち着きを取り戻し、配合飼料価格はやや高止まりではあるものの、生産原価は前年度よりやや減少した。今後も飼料費の高止まりが予想されるため、より一層のコスト見直しと共に、生産性向上による効率の良い経営を行うことが重要である。

(1) 繁殖性向上対策

◆ 受胎率の向上
受胎率向上には授乳母豚の個体栄養管理を徹底して行い、適度なボディーコンディションで離乳し、5日以内での発情再帰を促し、初発情交配で85%以上の受胎率を目指したい。

受胎の成否は自然交配、人工授精を問わず交配適期の把握が最も重要であり、そのためには発情状況の観察を注意して行い、2~3回の複数回交配が望ましい。交配に当たっては正常精液の利用が前提であり、定期的な精液検査は欠かせない。

再発情豚の交配に当たっては、発情徵候、交配時期に留意し、さらに不受胎となった場合の供用継続か更新かについては早期に判断する。妊娠鑑定は早期に確実に行い、空胎豚の無駄な飼養を無くし、妊娠豚に関しては個体管理を徹底して事故防止に努める。また、受胎率低下は夏場交配（暑熱環境）によることが多く、雄豚へのドリップクーリングや気温の上がらない早朝に交配を行うなどの夏場対策が必要である。

◆ 分娩率の向上

折角の妊娠も分娩まで至らなければ大きな損失になる。妊娠豚の栄養・飼養管理を十分に注意し、母豚移動などに伴う物理的事故原因の排除、日本脳炎やパルボの予防処置等、流・早・死産をさせないよう心掛け妊娠豚を無事分娩させたい。

◆ 育成率の向上

種雌豚 1 頭当たりの生産性を上げるには、育成率の向上と安定が欠かせない。育成率向上の要点は、哺乳子豚の飼養・衛生管理で、本事例中の哺乳子豚事故内容として虚弱と圧死によるものが多く、虚弱に関しては妊娠豚の適切な栄養管理を行い、なるべく虚弱子豚を出さないよう心掛ける。また、圧死に関しては分娩房の構造や子豚の居住環境、母豚の性質・泌乳能力など幾つかの要因が考えられるので、原因の究明と対策が必要である。県内の優良事例では分割授乳や授乳母豚の飼料給与中は哺乳子豚を隔離することで圧死等の事故低減を図り、育成率の向上に成功している事例もあることから、分娩看護及び哺乳管理に問題のある事例はこうした、管理も取り入れながら、改善に取り組んで欲しい。また、十分な労働力の確保が難しい時に疎かになりがちな部分でもあり、今後の改善には均一的な労働力確保か計画的な交配分娩管理も必要。

(2) 肥育成績向上対策

◆ 種雌豚当たり出荷頭数の増頭と事故率の低下

対象経営における肥育成績の改善ポイントは種雌豚 1 頭当たり出荷頭数、即ち枝肉出荷量の向上にある。

県畜産経営指標の肥育技術では肉豚出荷生体重 115kg 前後で枝肉重量 75kg 前後となっており、これら指標値をクリアーするためには、多様化する疾病に対する予防対策の徹底と密飼い等の飼養管理を改善することにより、生産した豚の損耗を防止し事故率の低下に努め、1 母豚当たり年間出荷頭数 21.4 頭以上、出荷枝肉量 1,600kg 以上を目指して欲しい。

離乳後事故率に関しては、表-4 にあるように平成 15 年以降上昇の傾向にあつたが、今期は安定してきた。事故の内容は主に PRRS と呼吸器系による被害が多

く、離乳後30kgまでの事故が目立っている。オールイン・オールアウト後の徹底した洗浄・消毒・乾燥の実施、外部導入豚の馴致や作業域の区別や人の流れ、ピッゲフローの見直し等、各農場での問題点の把握と各機関との連携による改善が必要である。

◆ 出荷豚（肉質）評価の向上

肉豚評価を左右する主な要因は概ね3つに大別される。

- ① 素豚（遺伝的要因）
- ② 飼養技術（飼料の質・栄養水準と給与方法、豚群の編成等）
- ③ 出荷技術（出荷日令・体重・出荷先選定）

最も基本的な要因は①の遺伝的資質であるが、これは母豚群の品種・系統構成によるもので長期にわたるデータに基づく選抜が基本で短期的な改良は難しい。

飼料の質と給与方法については、素豚の資質にあった栄養レベルの飼料により適度な発育の早さ（出荷日令と体重）で高い上物率が得られるよう飼料の選択と給与をする。

同時離乳腹数の多い大型経営ではできるだけ同質、近似日令の豚群編成に心掛け、雄雌別群として豚群の資質と発育ステージにあった段階的飼料栄養水準飼料の給与（フェイズフィーディング）を行う。

肉豚出荷に対しての個体チェックは不可欠であり、個体計量はその基本である。

個体標識により、個体経歴から枝肉評価まで一連のデータとしてその結果が次の交配や選抜・淘汰にフィードバックできるシステム化が望ましい。

（3）畜産環境対策

家畜排泄物は、これまで畜産業における資源として農産物や飼料作物の生産に有效地に利用されてきた。しかしながら、近年、畜産経営の大規模化の進行、高齢化に伴う農作業省力化等を背景として家畜排泄物の資源としての利用が困難になりつつある一方、地域の生活環境に関する問題も生じている。

畜産経営に起因する環境問題発生率は、家畜飼養規模の拡大や混住化の進展等に伴い増加している。こうした中で、苦情の内容は全家畜を通じて悪臭関連が最も多く、ついで害虫発生や水質汚濁である。家畜排泄物について、その適正な管理を確保し、堆肥として活用するなどの資源としての有効利用を一層促進していく必要がある。

◆ 臭気対策

畜舎内の臭気は舎内にある糞尿の量に左右され、畜舎内の基本的な臭気対策は糞尿の早期搬出の励行である。また、周辺の住宅事情等によっては周囲から苦情の出

る前に消臭剤・脱臭剤の利用など、先手を打った行動が極めて重要である。

◆ 堆肥の流通促進

有機農産物需要の増大を背景に家畜糞の需要が高まっており、地域を越えた広域流通化の機運にある。

これに応えて、供給できる堆肥の質量・販売条件などを堆肥流通情報として畜産会ホームページ上で広報しているので、良質堆肥の生産と流通の情報化への積極的協力を願いたい。また最近、耕畜連携という言葉が誌面上でも良く見かけるようになった。今後、畜産サイドも堆肥づくりだけでなく、いかに利用者側の意見や希望を吸収し製品を提供できるかが課題になる。まずは生産した堆肥の成分程度は知つておく必要があるだろう。

(4) 食肉の販売取り組み

◆ 安全性・信頼性をアピールできる県産豚肉の生産・販売

近年、国内外の家畜や家禽の疾病の発生に伴い、消費者は食肉の安全性・信頼性にとても高い関心を持つようになった。これからは消費者に対する食肉の安全性・信頼性の提示は必要不可欠なものとなる。そのためには生産段階での適切な飼養管理、一般衛生管理をきちんと行い、より健康で安全な食肉を消費者に提供しなければならない。また、トレーサビリティーシステムの構築やJAS認定制度の活用など消費者の目に見える安心安全を目指す。

これからの中経営は、豚肉生産だけでなく経営の生き残りをかけて、どのような付加価値を付けて何処に売り込むのかのマーケティング戦略が必要になる。現在の県内豚肉自給率はわずか6~7%に過ぎない。県内養豚生産者は過去10年で半数近くまで減少し、出荷頭数は年々減少傾向にある中で、県産豚肉自体が付加価値といえるようになってきた。銘柄化だけが付加価値を付ける方法ではなく、消費者のニーズに応えられるような安全で美味しい豚肉を生産し、地産地消や生産者の顔が見える販売方式を前面に出すなどして、消費者に信頼され、評価される生産・販売を心掛ける必要がある。

4. 経営診断分析図表

表-1 平成22年度 畜豚経営技術分析数値(経営規模・繁殖・生産技術)

区分 経営規 模	項目	(H20) NO.1	(H21) NO.1	(H22) NO.1	(H20) NO.2	(H21) NO.2	(H22) NO.2	(H20) NO.3	(H21) NO.3	(H22) NO.3	(H20) NO.4	(H21) NO.4	(H22) NO.4	平均値	最大値	最小値	指標	前年平均値	
		一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営												
1 腹 当 総 產 子 数	1人当り飼養母豚数	53.0	56.0	59.5	60.0	60.5	58.7	57.4	50.4	52.5	64.0	58.7	64.0	52.5	—	—	—	—	56.8
1腹当生存子豚頭数(頭)	1人当り飼養雌豚数	1.5	1.6	1.7	3.8	3.7	4.8	2.6	3.0	2.7	4.6	3.4	4.8	1.7	—	—	—	—	2.6
1腹当離乳仔豚頭数(頭)	1腹当生存子豚頭数(頭)	10.6	10.8	11.0	13.2	12.9	11.0	11.3	11.4	10.7	11.3	10.7	11.3	12.3	10.7	—	—	—	11.6
母豚1頭当生存子豚頭数(頭)	1腹当離乳仔豚頭数(頭)	10.4	10.3	10.5	11.9	12.1	11.4	10.3	10.4	10.3	9.0	10.3	11.4	9.0	10.6頭以上	—	—	—	10.9
母豚1頭当生存子豚頭数(頭)	母豚1頭当離乳仔豚頭数(頭)	9.0	9.1	9.2	9.4	9.4	9.5	9.1	9.3	9.1	8.2	9.0	9.5	8.2	9.8頭以上	—	—	—	9.2
母豚育成率(%)	1腹当離乳仔豚事故(頭)	24.1	24.1	23.8	25.7	28.0	26.4	24.3	25.6	21.2	20.3	22.9	21.2	20.3	22.9	20.3	24.4頭以上	—	24.7
年間離乳日令(日)	年間離乳日令(日)	20.2	20.7	21.0	21.0	21.4	21.6	20.3	22.5	19.1	18.2	20.0	20.0	21.6	18.2	22.5頭以上	—	—	20.5
母豚更新率(%)	母豚更新率(%)	86.7	88.3	87.6	79.0	77.7	83.1	88.3	89.1	88.3	90.8	87.5	90.8	83.1	92%前後	—	—	—	84.7
分娩回転(回)	分娩回転(回)	2.32	2.34	2.28	2.16	2.31	2.31	2.36	2.45	2.07	2.70	2.70	2.36	2.57	27.1	23.6	25日前後	—	17.0
肥育1母豚当年間出荷頭数(頭)	肥育1母豚当年間出荷頭数(頭)	18.1	17.4	18.5	20.5	19.0	21.2	19.7	20.9	19.7	17.8	19.3	21.2	17.8	21.4頭以上	—	—	—	19.4
肉豚出荷1頭生体量(kg)	肉豚出荷1頭生体量(kg)	113.7	115.6	115.5	110.9	113.0	113.4	115.9	116.3	114.1	114.0	114.3	115.5	113.4	115kg前後	—	—	—	113.5
1頭当り枝肉量(kg)	1頭当り枝肉量(kg)	74.4	75.7	75.6	73.3	74.7	75.0	75.3	75.6	75.8	75.7	75.5	75.8	75.0	75kg前後	—	—	—	74.3
母豚1頭当出荷枝肉量(kg)	母豚1頭当出荷枝肉量(kg)	1,325.4	1,283.8	1,367.1	1,480.2	1,383.5	1,547.3	1,486.6	1,569.7	1,486.4	1,305.5	1,427.3	1,547.3	1,308.5	1,600kg以上	—	—	—	1,431
農場(経営)飼料要求率	農場(経営)飼料要求率	3.49	3.37	3.36	3.50	3.57	3.57	3.44	3.43	3.59	3.58	3.79	3.58	3.36	3.4%以下	—	—	—	3.48
枝肉経営飼料要求率	枝肉経営飼料要求率	5.42	5.27	5.09	5.40	5.34	5.30	5.31	5.43	5.87	5.47	5.87	5.25	5.25	5.25	—	—	—	5.27
事故率(離乳・出荷)(%)	事故率(離乳・出荷)(%)	14.6	7.9	7.3	6.3	6.8	6.4	8.0	7.0	8.4	5.9	7.0	8.4	5.9	3%以下	—	—	—	9.7

* 1母豚当年間出荷頭数=(肉豚出荷+候補豚繋出し+子豚出荷)/年間平均母豚數

表-2 平成22年度 種雌豚1頭当り損益分析表

項目	(H20)農場番号		(H21)		(H22)		(H20)		(H21)		(H22)		(H22)		
	NO.1	NO.1	NO.1	NO.1	NO.2	NO.2	NO.2	NO.2	NO.3	NO.3	NO.3	NO.4	NO.4	NO.4	
期首棚卸高	80,435	97,144	117,139	96,952	89,717	112,849	198,122	230,192	189,135	143,707	140,708	189,135	112,849	139,018	
(購入飼料費)	307,540	253,866	256,695	383,699	336,561	331,618	517,949	445,682	389,355	278,270	313,985	389,355	256,695	345,370	
(素豚費)	3,274	2,312					19,229	10,853	9,823		6,342		9,823	2,312	10,853
(衛生費)	51,833	47,189	36,490	54,804	50,982	46,308	37,525	45,116	36,505	12,940	33,061	46,308	12,940	47,762	
(運搬費)	8,183	2,636	7,415	11,194	14,038	12,753					4,152		8,107	12,753	4,152
(諸材料費)	7,162	9,245		11,505	3,599	9,719	37,525	8,596	4,238	6,966		6,975	9,719	4,239	
(修繕費)	23,486	10,835	12,210	21,458	5,881	12,461	5,748	6,447	47,477	6,259	19,602	47,477	6,259	7,738	
(水道光熱費)	30,578	29,962	24,193	36,224	29,107	27,351	34,383	37,100	35,882	22,997	27,601	35,862	22,997	32,056	
(減価償却費)	36,767	26,661	24,641		24,335	17,750	49,289	56,846	70,535	12,279	31,301	70,535	12,279	35,947	
(人件費)	117,896	110,711	100,196	94,831	96,022	105,382	141,425	144,807	151,066	120,966	119,403	151,066	100,196	117,180	
(飼養費)	1,980			2,987	2,618	2,698	3,874	315		1,294		1,996	2,698	1,294	1,467
生産費用	583,699	493,431	480,235	616,702	563,142	566,166	811,288	755,761	744,882	473,014	566,069	744,882	473,014	604,111	
期末棚卸高	△ 102,517	△ 124,516	△ 103,661	△ 90,384	△ 109,528	△ 120,632	△ 202,154	△ 195,861	△ 161,841	△ 129,194	△ 128,845	△ 103,661	△ 161,841	△ 143,302	
期中種豚販賣額	7,333	10,704	11,858	8,689	15,750	14,875	1,917	4,814		13,559	13,431	14,875	11,858	10,423	
当期生産原価	559,285	455,354	481,855	614,582	527,580	543,456	805,339	785,278	772,156	473,968	567,859	772,156	473,968	589,404	
販売管理費計	168,031	173,461	148,140	168,777	132,306	137,610	153,622	158,718	139,871	72,665	124,572	148,140	72,665	154,828	
事業外費用	21,875	13,755	12,227	18,350	28,205	28,496	5,019	6,461	5,072	7,023	13,205	28,496	5,072	16,140	
費用合計	749,171	642,570	642,222	801,709	688,091	709,563	963,980	950,457	917,039	553,656	705,635	917,039	553,656	760,373	
生産物売上高	717,765	591,440	642,908	717,482	584,311	681,991	841,793	728,422	731,887	533,570	647,589	731,887	533,570	634,724	
(肉豚売上高)	692,917	563,119	629,025	689,411	567,002	655,168	832,335	720,661	728,765	515,024	631,996	728,765	515,024	616,927	
事業外収益	34,238	46,993	21,961	54,358	113,838	28,797	135,920	107,962	54,790	27,752	33,325	54,790	21,961	39,598	
総収益	752,918	638,433	664,889	771,840	698,150	710,798	977,713	836,384	786,677	561,323	680,914	786,677	561,323	724,322	
当期利益金	3,747	△ 4,136	22,647	△ 29,889	10,059	1,225	13,733	△ 114,072	△ 130,423	7,666	△ 24,721	22,647	△ 130,423	△ 36,050	
所得額	63,161	52,163	68,678	21,285	60,836	53,541	153,160	28,816	19,280	20,086	40,391	68,678	19,280	47,272	

表-3 平成22年度 農場別経済性分析表

項目	農場 No.	(H20) NO.1	(H21) NO.1	(H22) NO.1	(H20) NO.2	(H21) NO.2	(H22) NO.2	(H20) NO.3	(H21) NO.3	(H22) NO.3	(H20) NO.4	(H21) NO.4	(H22) NO.4	平均	最大値	最小値	指標	前年平均値
		単位	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	
1、売上高飼料費率		42.8	42.9	39.9	53.5	57.6	48.6	61.5	61.2	53.2	52.2	48.5	53.2	39.9	50%以下	53.9		
2、売上高人件費率		16.4	18.7	15.6	13.2	16.4	15.5	16.8	19.9	20.6	22.7	18.6	22.7	15.5	17%前後	18.3		
3、売上高衛生費率		7.2	7.9	5.7	7.6	8.7	6.8	4.5	6.2	5.0	2.4	5.0	6.8	2.4	8%以下	7.6		
4、売上高支払利息率		1.7	2	1.4	1.3	1.5	1.2	0	0	0.0	1.3	1.0	1.4	0.0	3%以下	1.2		
5、売上高純利益率		0.5	-0.6	3.5	-4.2	1.7	0.2	1.6	-15.7	-17.8	1.4	-3.2	3.5	-17.8	6%以上	-4.9		
6、売上高所得率		8.8	0.1	10.7	3.0	0.1	7.9	18.2	0.0	2.6	3.8	6.3	10.7	2.6	15%以上	0.1		
7、飼料1kg平均価格	(円)	43	37	36	52	46	41	66	53	48	36	40.3	48	36			45.5	
8、生体kg当たり販売額	(円)	342	287	302	303	271	280	365	298	326	261	292.3	326	261			285.5	
9、生体kg当たり生産原価	(円)	276	232	231	276	269	242	353	325	345	241	264.8	345	231			275.5	
10、枝肉kg当たり販売額	(円)	523	438	460	467	411	424	562	459	490	394	442.0	490	394			436.1	
11、枝肉kg当たり生産原価	(円)	422	354	353	417	382	352	544	500	520	362	396.8	520	352			412.3	
12、出荷豚1頭販売額	(円)	38,914	33,176	34,820	34,273	30,683	31,774	42,313	34,694	37,185	29,810	33,397	37,155	29,810			32,851	
13、出荷豚1頭生産原価	(円)	31,408	26,827	26,674	30,553	28,550	26,356	40,941	37,805	39,399	27,434	29,966	39,399	26,356			31,061	
14、1母豚当たり売上高	(円)	717,765	591,440	642,908	717,482	584,311	681,991	841,793	728,422	731,887	533,570	647,389	731,887	533,570	63万円以上	634,725		
15、1母豚当たり生産原価	(円)	559,265	455,354	481,855	614,582	527,580	543,456	805,339	785,278	772,156	473,968	567,859	772,156	473,968	57万円以下	589,404		
16、1母豚当たり純利益	(円)	3,747	△ 4,136	22,647	△ 29,869	10,059	1,225	13,733	△ 114,072	△ 130,423	7,666	△ 24,721	22,647	△ 130,423	△ 36,050			
17、1母豚当たり所得	(円)	63,161	52,163	68,678	21,285	60,836	53,541	153,160	28,816	19,260	20,086	40,391	68,678	19,260	10万円以上	47,272		

表-4 神奈川県10カ年間 奮豚経営飼養技術分析結果の平均値

	年 度	13('01)	14('02)	15('03)	16('04)	17('05)	18('06)	19('07)	20('08)	21('09)	22('10)
経営規模	診断集計戸数(戸)	7	6	6	6	6	6	3	3	3	4
	労働力人員(人)	3.2	5.2	3.5	3.8	4	3.7	4.8	4.0	4.0	6.0
	母豚常時飼養頭数(頭)	267.3	292.5	182	225.9	229.2	221.5	303.4	220.2	224.9	367.4
繁殖	雄豚常時飼養頭数(頭)	17.3	18.2	9.6	9.6	9.8	9.9	11.4	8.4	8.8	21.1
	1腹当生存仔豚頭数(頭)	10.4	10.4	10.4	10.4	10.2	10.6	11.1	10.9	10.9	10.3
	1母豚当年間離乳頭数(頭)	9.3	9.4	9.3	9.3	9.2	9.4	9.4	9.2	9.3	9.0
成績	育成率(%)	89.5	90.7	89.5	88.6	90.4	88.7	85.2	84.7	85.0	87.5
	分娩回転数(回)	2.28	2.18	2.21	2.33	2.29	2.21	2.3	2.28	2.37	2.23
	離乳日令(日)	24.3	25.5	25.5	24.3	24.4	25.8	25.4	25.6	26.3	25.7
肥育	母豚更新率(%)	43	36.8	35.2	44.8	40.6	39.8	40.3	36.6	27.1	41.2
	1母豚当り肉豚出荷頭数(頭)	19.7	19.2	19.6	19.6	19	18.6	19.6	19.4	19.1	19.3
	肉豚出荷体重(kg)	111.5	112.0	113.2	113.6	114.1	112.8	112.3	113.5	115.0	114.3
成績	1頭当り枝肉量(kg)	73.3	73.5	74.2	74.3	74.9	74.0	75.0	74.3	75.3	75.5
	1母豚当り枝肉出荷量(kg)	1,421	1,392.8	1,382.6	1,424.7	1,377.0	1,347.0	1,411.7	1,430.7	1,412.3	1,427.3
	事故率(離乳一出荷)(%)	6.5	5.2	4.9	7.2	9	7.8	12.9	9.7	7.2	7.0
(参考)	農場飼料要求率	3.5	3.45	3.55	3.54	3.46	3.46	3.60	3.48	3.46	3.58
	枝肉飼料要求率	5.3	5.31	5.45	5.45	5.38	5.36	5.61	5.27	5.33	5.47
	県内豚飼養戸数(戸)	120	110	100	99	95	88	82	69	71	64
県内豚飼養頭数(頭)	98,400	95,500	98,800	92,400	86,500	78,400	76,800	79,700	74,900		
	県内1戸当たり平均飼養頭数(頭)	820	868	985	998	973	983	956	1,113	1,122	1,170

神奈川県10カ年間 農豚経営性分析結果の平均

	年 度	13('01)	14('02)	15('03)	16('04)	17('05)	18('06)	19('07)	20('08)	21('09)	22('10)
	診断集計戸数(戸)	7	6	6	6	6	6	3	3	3	4
経	1母豚当り売上高	658,065	661,272	609,286	681,711	655,894	633,030	669,429	759,013	634,725	647,589
性	枝肉kg当たり単価	455	461	420	466	465	464	472	517	436	442
指	1母豚当り飼料費	252,540	267,059	284,263	312,109	287,851	283,089	363,449	403,063	345,370	313,985
標	飼 料 単 価	33.6	36.3	38.4	40.4	38.9	40.0	48.1	53.6	45.5	40.3
売	1母豚当り生産原価	483,163	499,365	515,759	540,350	523,324	494,520	578,444	659,728	589,404	567,859
上	1母豚当り純利益	57,723	66,205	△1,605	41,995	9,309	10,465	8,474	△4,130	△36,050	△24,721
高	売上高飼料費率	39.3	40.3	47.5	45.7	43.6	44.9	53.7	52.6	53.9	48.5
衛	売上高人件費率	16.5	17.3	16.8	14.6	15.8	15.4	14.3	15.5	18.3	18.6
生	売上高衛生費率	4.9	4.4	5.1	5.7	6.4	5.4	6.2	6.4	7.6	5.0
支	売上高支払利息率	1.5	1.3	1.4	0.9	0.7	1.0	1.1	1.0	1.2	1.0
利	売上高純利益率	8.5	9.4	-1.1	6.1	1.2	1.7	1.2	-0.7	-4.9	-3.2
得	売上高所得率	17.6	19.3	10.0	14.9	10.7	11.0	7.7	10.0	7.7	6.3